

祈り

昨年、紅白で歌われたクミコの「祈り」を車を運転しながらCDで改めてゆっくりと聴いた。涙がこぼれた。実はこの歌の主人公、折鶴の少女佐々木禎子ちゃんは私の家の前の床屋さんのお嬢さんだった。禎子ちゃんは活発でいつも走っている女の子だった。戦後3年、当時の私は4年生、彼女のお兄さん雅弘さんは私の妹と一緒に1年生、禎子ちゃんは5歳くらいだったのだろうか。家族はまだ瓦礫の街広島市の中心街に戦後移り住んだのだが、私たちは無邪気なもので焼け跡の缶詰工場の跡地で焼け残った缶詰を開けてどろどろになっている中身を面白がって次々見つけては遊んでいた。その当時は満足な靴はなく、下駄か裸足。運動会の日には裸足で登校しながら道に落ちている馬の糞を「これ踏んだら一等賞！」などとふざけあっていた。

私たち家族は父を筆頭に子どもたちも佐々木理容室の常連で、おじさんとおばさんとも仲良しだった。雅弘さんが大きくなったら「芙美江ちゃんをお嫁さんにする」と言っていたよね、と今も思い出して妹が笑っている。

千羽鶴に希望を託して薬の紙で千羽鶴を折り続け、生きることを祈り続けた禎子ちゃん。歌詞の中に「こわい」という言葉がある。進行する病気の中でどれほど不安で怖かったことか。それでも「今まで幸せだった、ありがとう」と言う歌詞の言葉、これはきっと禎子ちゃんの気持ちの代弁かと胸が苦しくなった。12歳の命だった禎子ちゃん。今私は73歳。あれから私は64年生きてきた。これだけの年月の差が突然私におそいかかってきた。この命の長さの差をどう考えればいいのか。彼女が失ったこの年月。私は十分生きたか。意味ある年月を生きたか。中身はともかく確実に私は彼女より57年長く生きた。広島が今のような街に復興するのをしっかりと見た。新幹線が通り、一晩かけて到着していた東京に5時間もかからないで行けるようになった。テレビはカラーテレビになり、3Dも観られるようになった。そんな今を彼女は知らない。どれほど無念な中で人生の終わりを迎えたことか。愛する娘をどんな思いでおじさんとおばさんは見送ったのだろうか。禎子ちゃんの悲しみを誰も2度と味わってはいけない、と念じながらも世界では未だに戦争がなくなる現実がある。

「祈り」のなかにあるメッセージを改めて聴きながら、あの元気に走りまわっていた禎子ちゃんの姿が脳裏から離れない。

上記の文章を書いて間もなく3月11日の東日本の大震災が起こった。今、福島原発の問題は日本中に大きな混乱を引き起こしている。再び禎子ちゃんをつくってはならない。生まれた命、その命のもてる力を何人と言えども切り取ってはならない。

平成23年2月